

|  |  |
|--|--|
| 上演5<br>2025年7月26日（土）5校目<br>関東ブロック（千葉）<br>千葉県立松戸高等学校<br>「わたし」 | 第49回全国高等学校総合文化祭演劇部門<br>第71回全国高等学校演劇大会<br><b>講評文</b><br>生徒講評委員会 担当委員<br>松山東雲中学・高等学校（愛媛）<br>作田 悠貴葉 |
|--|--|

人がゴリラを演じるという演劇でしか出せない世界観を持っていて斬新な劇だと思った。しかし、見ているうちに「人間」と「動物」という境界がなくなり、人も動物も同じ視点を持っていることに気付かされる作品だった。

この物語は、不登校傾向にあった琴葉が、転校してきた「わたし」の世話役に立候補するところから始まる。どこか不思議な雰囲気が漂い、相手の懐に深く入り込んでくる「わたし」と交流を重ねることで、琴葉は、真っ直ぐに思いを伝えられるようになっていく。この「わたし」は、実はゴリラであり、動物園で眠っている間だけ学校に来ていたのだ。にわかには信じ難いこの現象は、彼女の「ふるさと」や「家族」に対する強い思いから起きていた。人間が起こした戦争によって家族や友人を失い、ひとり孤独になってしまったにも関わらず、それでも人間とコミュニケーションを取ろうとする直向きな姿に強く心を打たれた。ゴリラは目を見てコミュニケーションを取るが、人間は言葉があるのに仲良くなれないと勝手に決めつけ、コミュニケーションを取ろうとしない。これは劇中の登場人物だけでなく、私たちにも言えるのではないか。講評活動を通して、意見を交わすうちに、私たち自身も普段から思い込みに囚われていたことに気づかされた。

また、人間だからとか動物だからといった種別に縛られることのない普遍的な友情についても考えさせられた。琴葉が「わたし」に送別会をするシーンは、とても感動的だった。アフリカはあれど、故郷はない。それでもクラスメイトに協力を求め、共に故郷を作り上げ、さらに擬似的ではあっても、家族との再会まで叶えた彼女らの思いやりに自然と涙があふれた。

討論では、水で遊んでいる時の音響の合わせ方や、照明や小道具の使い方の工夫についても言及されていた。また、空間の使い方として檻が使われていたが、動物園は檻で囲まれており、学校は縛られていると感じる場所であるため、二重の意味があるのではないかという意見も出た。そして、特に私たちの心を驚撃にしたのは、役者の演技だ。ゴリラの走り方や、ドラミングの仕方がリアルであり、送別会の際に皆がゴリラの真似をするシーンは、本当にアフリカのゴリラたちの群れのように感じられた。演劇だからこそ、リアリティーを帯びる。その良さを改めて感じることができた瞬間だった。

この劇では戦争や社会に対する訴え、森林伐採などの社会的な問題も取り上げられていた。動物であれ人間であれ、住む場所を奪われ、家族と引き裂かれるようなことはあってはならない。今平和で穏やかに生活できることは当たり前ではないのだと考えさせられた。

